

第一回効率的な輸出物流の構築に関する意見交換会

開催結果概要

1. 開催日: 令和3年3月2日(火)10:00～12:30

2. 参加者:

【常設委員】

イオン株式会社、株式会社パン・パシフィック・インターナショナルホールディングス、NAX JAPAN株式会社、日本通運株式会社、ヤマトホールディングス株式会社、郵船ロジスティクス株式会社、公益財団法人流通経済研究所、全国農業協同組合連合会

【専門委員】

北海道物産トレーディング株式会社、日本園芸農業協同組合連合会、山梨県果実輸出促進協議会、大果大阪青果株式会社、株式会社アライドコーポレーション

【省庁】

国土交通省 大臣官房審議官(公共交通・物流政策)

国土交通省 総合政策局物流政策課

国土交通省 港湾局計画課

国土交通省 航空局空港業務課

農林水産省 食品流通課

農林水産省 輸出プロジェクト室

3. 開催概要

2030年・5兆円の目標達成に向けた輸出拡大のためには、大ロットで経済的な輸出を実践する効率的な物流の構築が求められていることから、①重要輸出品目の輸出物流と②主要港湾活用の二つの視座を保持した、物流有識者と施策企画担当者との意見交換の場を設置。第一回は青果物をテーマとして、輸出拡大に向けた物流課題について検討を実施した

4. 主な発言等

(1)開催挨拶(杉中審議官)

- 昨年11月に政府において取りまとめられた輸出拡大実行戦略の狙いは、一言で表すとマーケットインの発想での輸出を全国で実現していくことである
- そのための具体的方策の第一弾として、2月16日に輸出産地のリストを公表した。輸出産地を明確化し、マーケットインの発想からターゲットとする輸

出先国の規制やニーズに対応した生産を行う体制を整備しようとしている

- 農林水産物や食品は生産されるだけで終わりではなく、様々な工程を経て海外で販売される。そのため、マーケットインの実現のためには流通の占める役割が非常に大きくなる。このため、輸出拡大実行戦略においては、輸出物流のあり方について検討することとされており、具体的には、コールドチェーンなどの流通工程の改善、小ロット輸送の解消、効率的な流通による販売コストの低減が重要と考えている
- この検討会をきっかけに、日本の農産物の流れを変えていき、その変化をきっかけに日本の農産物流通全体を変えていくという意気込みで関係者の皆様と議論できればと考えている

(2)開催挨拶(金井審議官)

- 農林水産物の輸出を検討するにあたり、物流の課題に対応することは極めて重要である
- ロットを集め、それを効率的に輸送して、輸出先でもコールドチェーンを確保することで、サプライチェーン全体で効率化することが重要である。具体的な施策としてはソフト・ハード面で標準化を行い、物流に関するあらゆる情報をデジタル化し、さらにこれらの情報を扱うデータ連携基盤を構築することで安定的・効率的な物流を行うことが必要
- この観点は物流にとって非常に重要であるため、一気呵成に実装まで結び付け、物流全体の方策として有効なものとしたい

(3)意見交換会・主な発言概要

- 大ロット化の可能性を有する品目・産地について
 - 大ロットを確保するならば、ある程度生産量が確保されることが重要であるため、上位にあたる生産県が良い
 - 大ロット化の実現には軸となる生産地を定め、同一品目を近県と合わせて出荷することでロットを確保することが重要であるが、品目によっては、横連携を行うことが難しい場合もある。そのような品目に対し体制をどのように整備するかが課題となる
 - 複数産地から荷物を積載する方法(ミルクラン)について、農家が小さな運送屋と契約しており、特に、元受け輸送という商慣習・人手不足といった現状が存在。ミルクランを担う業者は存在せず、高額な運賃などで費用倒れしまう業者も多いのではないか
 - ミルクランを青果で展開する上では時間調整が課題。農林水産物の業界では親会社の強制力を発動させることが難しいが、バイヤー等が強制力を働かせることができれば、可能性はあるか
 - 物流の標準化、すなわち出荷する農家が物流に関して何をするべきか

を決めている状態が実現できれば、ミルクランもTMS(輸配送管理システム)も活用できるのではないか

- パレット化が実現されていれば、農家から出荷する際のコストと時間が縮減できると予想される
- 生産量の減少に関して、長期的な視点の最も大きな問題は、生産者の高齢化である。また、収穫できるまで少なくとも4-5年時間がかかるため、果実に関しては新規参入が難しい

● 物流のための統一容器・資材に関する見解について

- 容器やパレットに関しては、バラバラなものが利用されている。輸出に力を入れている自治体は統一化が進んでいるが、容器がバラバラな現状では、輸出業者は非常に手間がかかっている
- 輸送効率の観点から、近い将来、果実輸出における容器はパレット輸送の方向へ自然なシフトが起こり得るのではないか
- 梱包規格に関しては、大手電機メーカーでパレットではなく、紙のシートパレットを利用するなどの取組が存在、事例が参考となるのではないか
- 輸出仕向け地によっては環境意識への高まりもあり、環境問題に対応した、材料選びもまた重要な観点となる
- 青果物大ロットの混載便に関して言えば、温度保持や物流業者の採算性の問題・鮮度保持の問題が存在する
- 窒素充填式のCAIについては保有者が限られているなど、コンテナは欲しいときに必ず手元に入るという状況ではない
- 荷主単位で複数品目を同じパレットに載せてまとめていけば、産地出荷も可能となるため、荷主主導型の輸送をどう考えるのかも重要となる

● 市場経由の意義、市場の輸出拠点としての活用について

- 一日でも早く輸出先に届ける意義として、室温30-40℃の間で長距離を運ぶ中でもものの鮮度劣化の問題は明確に存在している。物流を見直した中で、鮮度劣化を10%防いだケースも存在する
- どんな地方の生産者でも、市場に向かうトラックは簡単に見つかるため、そちらを利用できるのではないか
- 市場で通関・食検・爆発物検査・農薬物検査を受けることができればよい、税関や証明書発行の整備も重要となる
- 市場を有効活用することが現状の問題へのアプローチとして適切なのではないか。市場が活況なのは深夜-朝までであり、昼から物流業界が詰め込みを行うなど、活用できる余地は大きい

● 選果規格の簡素化に関する見解について

- 韓国や中国の果実と比べて、日本で売られているそのままの規格の状態で輸出されており、それは価格に反映されているのではないか

- 販売現場サイズ・規格の簡素化については問題ないとする。むしろ、どの産地で、どのような生産者が、どのような思いで、どのようなルートを通じて生産されているのかが重要となる
- 日本の細かい規格は国内流通のためだけにある。海外のマーケットではものの細かいサイジングは必要なく、理想的には人件費の安い海外で選別を行い、日本では生産に集中すべきか
- マーケットインの観点から見た輸出課題への取組について
 - 海外でビジネスを行う人たちに対しては、「中長期的・安定的な供給はあるのか？」という質問をよく受けている一方で、生産者からは「海外は農林水産品を中長期的に買ってもらえるのか？」という質問が産地からも上がっており、物流に関しても同様のことを感じている
 - 生産者・物流・海外マーケティングも全員が一丸となって5-10年スパンでコミットメントをしなければ、事業として回っていかない
 - コンソーシアム的な取組により、課題の共有・物流の共有化・政策要求を含めたりリスクに対する対応を図る事例もある
 - 安定的な供給が重要、農産物の季節性という季節性によって、年間を通じて供給することができない。計画的に輸出用の産地とそれに伴う物流輸出拠点を考える必要がある
- 物流ルートやコストに関する見解について
 - 地方港の利用に関する検討については、物流業者というより、海運業者がペイし得るかどうか依存する
 - 船会社のコストは重要な要素である。また、実証研究を行ったとき、現地から近い港で出すよりも横持費用が安かった場合があった。途中で梱包し直しを行う中間事業者の梱包に対する慣れの度合いもコストに影響する
 - 横持を行った方が、コストがより安くなる場合でも、鮮度が落ちるケースもあり、鮮度とコストの間のバランスは食品の物流を検討するにあたり、非常に重要なポイントとなる

(6)閉会挨拶(池山審議官)

- 本日の意見交換会を通じて、青果物特有の産地・生産・商流の課題の特性がよく理解でき、パレット化・包装資材・トレーサビリティなどの物流特有のテーマについてもよく議論されていた。次回は水産物だが検討会メンバーには引き続き議論をしていただきたい
- 本日の意見交換会は国土交通省も参加、総合物流施策大綱においても重要なテーマであり、今後の具体的な進捗に繋がる会にしたい

以上